

Feel the NCGM Plus



国立研究開発法人
国立国際医療研究センター

NCGM通信

2024.12.26

Vol.13

9月～11月（季刊）



センター病院アトリウムにクリスマスツリーを設置しました！

CONTENTS

02 JIHSロゴマークが決定しました！

03 子どもNCGM見学デーを開催しました！

06 国府台病院祭を開催しました！

07 看護大学校の主なできごと「清瀬の風」

夏のオープンキャンパス / 秋の公開講座・ミニオープンキャンパス / 学生食堂「食堂 山茶花」命名者へ感謝状の贈呈 / 清秋祭の開催

11 センター病院診療科シリーズ

脾臓移植診療科 / 臨床ゲノム・メディカルゲノムセンター / 形成外科 / 人間ドックセンター / 救命救急センター・救急科 / 臨床工学室 / 国際診療部を紹介しています！

16 研修医の窓

18 センター病院の主なできごと

ブラックジャックセミナー / (看護部)夏のキャリア見学会 など

23 国際医療協力局グローバルヘルスレポート

在外職員奮闘記！！ カンボジア共和国 / ラオス人民共和国 / セネガル共和国



JIHSロゴマークが決定しました！

新機構のロゴマーク選定にあたり、職員の皆さま・看護大学の学生さまから多数のご応募をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。総数186点もの応募作が集まり、どれも力作で、応募者の皆さまの新機構「JIHS」への思いを伺い知ることができました。



審査会の様子

審査会では、外部の有識者の方々にもご参加いただき、活発で有意義な議論が繰り広げられました。多様な視点を取り入れながら、慎重に審査を進め、最終的に新機構を象徴するにふさわしいロゴマークが決定いたしました。

改めまして、応募いただいたみなさまに深く感謝申し上げます。

----- ロゴマークに込めた想い -----

このロゴマークは統合する国立感染症研究所と国立国際医療研究センター、二つの組織を制作のモチーフとしています。ロゴマークの外側の円は国立感染症研究所を象徴する“シャール”および国立国際医療研究センターから連想される“地球”を表し、クロスした十字のラインもまた、それぞれの組織を表し、両組織の統合による感染症対策の発展への決意と願いが込められています。内側の赤い円は日本の国立機関であることを象徴する“日の丸”を表現しています。

<理事長からのコメント>

NIID、NCGM両組織の職員の皆さま、看護大学の学生、研究課程部の皆さまからご応募いただき、私どもの想定を大きく上回る、186点もの応募がございました。外部の有識者の方にも参加いただき、審査をさせていただきました。ご応募いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

とても素晴らしいロゴが出来たと思います。皆さんは現在のNIID、NCGMのロゴに愛着があると思いますが、新しいロゴも好きになっていただき、いろいろな場面で使っていただきたいと思います。



こどもNCGM見学デーを開催しました！

8月27日、29日に職員の子どもを対象としたイベント「NCGMこども見学デー」を開催しました。2日間で、26家族・総勢62名（うち、こどもは35名）が参加し、職場見学を含む様々なコンテンツを家族で楽しみました。

本イベントは、お父さん・お母さんが日頃どのような職場で仕事をしているか知ってもらうことを目的とした初めての取り組みです。NCGMのことをより知っていただき、ファンになってもらいたいというという理事長の想いも込められています。（※今回は主に小学生を対象としています）

当日は研修棟5階大会議室に集合し、佐々木総務課長からの挨拶と説明で見学デーがスタートしました。イベントは終始和やかな雰囲気が進み、楽しさがあふれる一日となりました。



■ イベントのプログラム

- ・ AED機器や模擬患者等を使用したBLS講習（一次救命措置）
- ・ 看護部による手指消毒や脈拍（バイタル）等の体験学習
- ・ 人間ドックによる予防医学に関する体験

＜ 人 間 ド ッ ク セ ン タ ー ＞

「NCGM人間ドックセンターについて知る」「健康意識向上」「医療職種の経験」を目的として、ミニワークショップやヘルスクイズを通じた学び・見学・体験が行われました。



超音波検査を体験する様子



身長測定の様子



栄養クイズ



診察体験の様子



トーク・ミニワークショップ



白衣を着用した記念撮影

人間ドックセンターを見学しながら、クイズが出題されました。クイズをクリアするごとにシールが付与され、親子で楽しみながら、大いに盛り上がりました。お子さんだけでなく、保護者も興味深々と参加していました。

< シミュレーションセンター >

シミュレーションセンターでは、“こどもBLSコース”を受講しました。このコースでは、「BLSができる」「AEDが使用できる」ことを目標として、BLSの歴史から使用方法までを学びました。

胸骨圧迫は「強く」・「速く」・「休まずに」行うことを意識して周囲と協力して行い、チームプレイの大切さも学びました。

-----体験中の様子-----



コースを受講後、救命救急センター小林医師から受講証が授与されました。

< 看 護 部 >

*** 手洗いブース ***

「グリッターバグ」という教材を使って、正しい手洗いの仕方を学びました。専用の蛍光塗料を手に塗り、普段通りに手を洗った後で、洗い残しがあるかを確認します。参加者の皆さんは落とさきれなかった蛍光塗料の多さに驚きながらも、「ここに洗い残しが多いんだね!」とご家族で楽しく参加されていました。

*** 心音呼吸音ブース ***

シミュレーターだけでなく、体のさまざまな部位を聴診する体験も行われました。特に、正常な呼吸音を聞き分けるのが難しかったようで、みんな真剣に耳を傾けていました。

*** 血圧測定ブース ***

初めて血圧計を使用する方が多く、興味津々な様子で参加していました。血圧測定時に聞こえる血管の音を聞いたり、送気球を押したりすることを楽しんでいる姿が見られました。

----- 参加した職員と子どもの声 -----

・とても素晴らしい企画を実施くださり、また、スタッフの方々も丁寧に子ども達にレクチャーをくださり、心より感謝を申し上げます。家に帰ってから、見学内容を思い出し、色々と話しておりました。

・大満足だったようで、家で若干興奮気味で話をしてくれました。こどもにとって、かなり良い刺激になっている事は確かなようです。企画等、誠にありがとうございます。

・参加後、息子から興奮気味に見学デーで体験した内容を話してくれ、知らない子が沢山いたことで緊張したようですが、楽しく経験できたようでした。



このだい
通信

10月12日、国府台病院祭を開催しました

(寄稿)国府台病院 庶務係長 山口 智嗣

国府台病院祭は、地域の方々に国府台病院を幅広く知っていただき、身近に感じてもらうことを目的としており、令和元年の開催以来、5年ぶりの開催となりました。



青柳院長の開催挨拶に続き、市川市を中心に活動している創作太鼓集団「手児奈太鼓」さんによるパフォーマンスで迫力ある幕開けを飾りました。

職員による各種測定・健康相談・公開講座・ゲームコーナー・軽食コーナーなどの様子



血管年齢測定



栄養相談



公開講座



輪投げ
(ゲームコーナー)



軽食コーナー

病院祭終盤、様々な職種の職員で結成された「アンサンブル国府台」による演奏会では、1階ロビーを埋め尽くすほどの観客が集まりました。

フィナーレを飾る素晴らしい演奏と歌声に感動しました。

今回は、200名を超える方々にご参加いただきました。来年も、皆様に楽しんでいただける病院祭となるよう頑張りたいと思います。



清瀬の風

夏のオープンキャンパスを開催しました

(寄稿)国立看護大学校

国立看護大学校では、8月9日（金）、10日（土）の2日間、オープンキャンパスを開催しました。今回は、国立看護大学校のSNSやホームページに加え、NCGM公式 x でも配信し、2日間で577組1,085人（9日260組460名、10日317組625名）と多くの方々にご参加いただきました。親子、家族で参加いただいた方が多く、本学の教育の特徴や施設・設備について、じっくりとご覧いただくことができました。期間中は、学生からの名称募集で決定した食堂「山茶花(さざんか)」も営業し、2日間で700名を超えるの方々にご利用いただきました。

受付や案内、誘導には学生が積極的に関わり、キャンパスツアーでは、学生がツアーコンダクターとして各実習室や図書館など、本学の主要施設を自ら説明する形式で実施しました。また、「在学生と語ろう」のコーナーで、高校生にとって関心が高いであろう学生生活などについて学生と直接対話する時間を設けるなど、参加者にとっては、学生目線によりリアルに本学での学生生活や教育内容、特徴を知ることができる体験となったのではと考えています。

参加者からのアンケートでは、「学生や教職員が親切で丁寧だった」「雰囲気良かった」「設備が整っている」など、大変好意的な感想を多数いただきました。また、看護体験コーナーでも、多くの方が楽しそうに参加されていました。

今回のオープンキャンパスが、本学志望者の増加につながることを期待しています。



説明会の様子



国際看護学ミニレクチャーの様子



学生スタッフ



食堂「山茶花」の様子

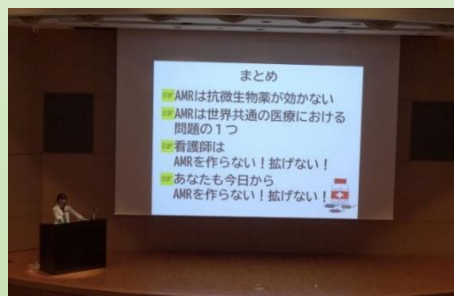
秋の公開講座・ミニオープンキャンパスを開催しました

(寄稿)国立看護大学校

9月8日、国立看護大学校で秋の公開講座・ミニオープンキャンパスを開催しました。午前の「公開講座」では、感染管理看護学の森准教授が「作らない！ 拡げない！ 看護師のAMR対策」をテーマに講演を行いました。森准教授は、AMR(多剤耐性)とは、それまで抗微生物薬が効いていた微生物にその薬剤が効かなくなった状況であり、AMRによる死亡者数は、2050年にはがんの患者を上回り、アジアはAMRによる死亡者数が最も多い地域になること、高齢化が進む日本でも喫緊の課題で政府はAMR対策アクションプランを策定していることを紹介しました。折しも、9月17日には米ワシントン大などの国際チームが、英医学誌ランセットに薬剤耐性菌による死者は、2050年までの25年間に世界で3900万人を超え、南アジアが最多であるとの推計を発表しています。



受付の様子



森准教授の公開講座

続いて、AMRは不十分な薬剤濃度によって作られるとした上で、AMR対策における看護師の業務の重要性について説明しました。適切な量・時間・期間による適切な抗菌薬治療をベッドサイドで確実に実施することや看護師自身の感染防止対策の適切な実施、患者・家族に正しい感染防止方法を教えること

や患者の観察と医師への情報提供などです。来場した高校生は、AMRという切り口から看護師の業務を理解し、その重要性や魅力を十分に感じてくれたものと思います。

また、処方された抗菌薬は医師の指示どおり服用し飲み切らなければならないことや、マスク・手洗い・ワクチンによる基本的な感染防止対策を行い抗微生物薬を必要とする状況を作らないこと、動物からの微生物伝播を避けるためにペットと一緒に寝ない等適切に接することなど、日常生活において注意すべき重要な点を述べた上で、これらの実践を通じて「あなたも今日からAMRを作らない！ 拡げない！」とのメッセージを伝え講演を締めくくりました。

なお、講演では、本学が感染看護の教育として日本の感染症看護専門看護師の約2割を輩出していることや特定行為研修のコースを設けていること、来年4月に国立感染症研究所と統合し国立健康危機管理研究機構(JIHS)が新設されることについても紹介されました。

午後の「ミニオープンキャンパス」では、本学の概要説明を行うほか、成人や在宅・老年の実習室を見学し体験していただくなどにより、47組・98名の方々に本学の特徴を理解してもらえよう工夫したプログラムを提供するとともに、食堂「山茶花」を営業しご利用いただきました。

8月の夏のオープンキャンパスに続き、公開講座とセットにした「秋のミニオープンキャンパス」でしたが、このような継続的な広報活動を通じて、本学の教育的特徴や施設・設備をより多くの高校生に知ってもらい、優秀な学生確保に繋げていくことができると考えています。

清瀬の風

学生食堂「食堂 山茶花」命名者へ感謝状を贈呈しました

(寄稿)国立看護大学校

国立看護大学校の学生食堂は、COVID-19の影響により3年間運営を休止しておりましたが、国際医療研究センター附属看護学校の同窓会である「蒼穹会（おおぞらかい）」から多大なご支援をいただき、本年4月2日に運営を再開しました。

学生食堂再開にあたり、学生及び教職員から名称募集を行ったところ計105件の応募があり、学生及び教職員の投票で最も多く支持された「食堂 山茶花」に決定しました。

「食堂 山茶花」は3年生の風間美德さんが命名したものです。「山茶花」は清瀬市の市花であり、花言葉は「ひたむきさ」「困難に打ち勝つ」というところから応募されたとのこと。清瀬市の秋のスタンプラリーでも、市民に紹介され、多くの方が訪れました。

風間さんには、鈴木理事長特任補佐および学内関係者同席のもと、大学校長から感謝状及び記念品の贈呈式を行いました。

この食堂整備については、蒼穹会のご支援を戴き、東門のバリアフリー化と看板等設置についても工事を完了しました。御礼申し上げます。



外観 「山茶花」の看板



右から 鈴木特任補佐、飯野学部長、風間さん、学校長

10月12日、13日の2日間、爽やかな秋晴れのもと国立看護大学校「清秋祭」(以下「清秋祭」)が開催されました。

今年度の清秋祭は5年ぶりの完全対面での開催ということもあり、学生は早い段階から清秋祭実行委員会を中心に入念な準備を進めてきました。本学学生間の繋がりのみならず、他校や地域の人、小さい子からお年寄りなど、清秋祭を通して多くの人と繋がりを持ち深めていきたいという思いから、テーマは「絆-つなぐ-」です。このテーマに沿って、子供も大人も誰もが楽しめる企画、地域住民の方も参加した聴診器体験や妊婦体験、血管年齢測定など自身の健康について見つめ直す機会となる企画



など、全22の企画を用意して地域の方々をお迎えしました。参加された方々は、学生の説明を受けながら楽しそうに、また、「なるほど」と頷きながら企画の体験をされていました。2日間で698名の多くの方々にご来校いただき、国立看護大学校の魅力をご存分に体感していただきました。

また、今回の清秋祭は、清瀬市と市内3大学による連携協定に基づく「清瀬アカデミア」の一環でもありました。このため、清瀬市広報誌「市報きよせ」のほか、市公式SNSでもPRをしていただきました。清瀬市と3大学共通の企画として、各大学が用意したクイズラリーを行いました。ちなみに、看護大学校のクイズは「地域の方々にも利用していただける食堂の名称は?」です。回答は「山茶花(さざんか)」。清瀬市の花であり、花言葉は『ひたむきさ』『困難に打ち勝つ』となります。

地域住民のほか多くの外部の方々にご来校いただき、クイズにも回答いただくことで、国立看護大学校に対しより親しみを持っていただけたと感じています。また、食堂「山茶花」の地域住民の利用者が増えることも期待しているところです。



(高齢者体験の様子)

(市報きよせ10月1日号)

3大学と清瀬市合同のクイズラリーイベントを開催
3大学の学祭にぜひお越しください!

3大学全ての学祭にご来場いただき、スマホでクイズにご回答くださった方に「きよせ棒」をプレゼント!
(無くなり次第終了)学祭情報、クイズラリーイベントの詳細は右記QRコードをご確認ください。
■未来創造課イノベーション推進係 ☎042-497-1807



詳しくはこちら

明治薬科大学 明薬祭

10月12日(土)・13日(日)
さわやかな秋の季節に、明薬祭は行われます!明薬祭実行委員会を中心に、大勢の学生たちが協力し、関わり合いながら運営しています。毎年一人ひとりの胸に明薬祭の熱い思い出が刻まれています。



国立看護大学校 清秋祭

10月12日(土)・13日(日)
22の企画を用意しており、楽しんでいただけること間違いなし!清秋祭を通して大学校の魅力を感じてください!



日本社会事業大学 社大祭

10月26日(土)・27日(日)
社大だよ!全員集合!大人も子供も関係なし!皆でワイワイ盛り上がりましょう!



センター病院診療科 シリーズ No.28

膵島移植診療科

当科は、先進的な糖尿病治療のひとつとして膵島移植を実施する専門性の高い診療科です。血糖値が不安定な1型糖尿病に対する脳死・心停止ドナーからの同種膵島移植を、当科を中心として病院各科（肝胆膵外科、糖尿病内分泌代謝科、その他多数の科）やコーディネーター、細胞調製室など多くの部署や研究所との緊密な連携をもって実施しています。

同種膵島移植は第一種再生医療として行っています。また、先進医療Bかつ第三種再生医療である難治性慢性膵炎等に対する膵全摘術に伴う自家膵島移植術を多機関共同臨床試験の研究代表施設として実施しています。こちら肝胆膵外科、糖尿病内分泌代謝科、消化器内科などとともに連携して行っています。

さらに、既存の膵島移植の成績向上や課題解決のための次世代細胞移植・再生医療の臨床研究の実施を目指しています。これらには、ブタ膵島を用いた異種移植や、ヒトiPS細胞由来膵島細胞移植などがあります。



(膵島移植診療科長 霜田 雅之)

センター病院 診療科シリーズ No.29

臨床ゲノム科 / メディカルゲノムセンター

臨床ゲノム科は、遺伝性疾患に関する患者さんご家族の不安、悩み、疑問に対応する遺伝医療の専門診療科であり、遺伝情報の理解を深めるための遺伝カウンセリングと遺伝学的検査を提供しています。私たちは、臨床遺伝専門医、認定遺伝カウンセラー、公認心理師から成る多職種の医療チームを構成し、安心してご相談いただける環境を整えています。遺伝医療の進歩は目覚ましく、当施設では、臨床ゲノム科とメディカルゲノムセンターが連携して、遺伝性疾患の診断や治療法の選択、個別化医療の実現を目指したゲノム解析研究に取り組んでいます。

私たちは、患者さんの健康と生活の質の向上に貢献することを使命と考えており、そのために、最新の研究成果に基づく科学的アプローチを大切にしています。ゲノムに関するお悩みや疑問がございましたら、ぜひお気軽にご相談ください。

臨床ゲノム科：

加藤 規弘（臨床ゲノム科診療科長）

荒川 玲子（臨床ゲノム科医長）

高野 梢（認定遺伝カウンセラー）

浦野 真理（認定遺伝カウンセラー・公認心理師・臨床心理士）



形成外科では下記の通り「**スーパーマイクロサージャリー**」を駆使した高難度再建外科手術を行っています。

- ・ 0.5mm以下の血管吻合を行う**超微小外科（スーパーマイクロサージャリー）**で様々な高難度再建外科手術が可能
- ・ 皮膚・脂肪・リンパ・神経・筋肉・骨・消化管などを移植し、鼻・耳・口・頭頸部・乳房・手指・陰茎・体幹・下肢など、**全身の様々な組織欠損・機能障害が再建可能**
- ・ **日本発の技術**であり、当センター形成外科医師が**世界初の術式**を多数報告し、**世界各地で公開手術・依頼手術**を行い手術指導
- ・ 海外から、患者のほか医師も積極的に受け入れ、2017年以降**128人**の外国人医師を受け入れ指導

NCGM院内の様々な診療科・部門の皆様のご協力で、再建外科領域の国際的診療レベル向上にある程度貢献できたのではないかと考えています。今後もNCGM発世界初の手術・エビデンスを報告できるようスタッフ一同 臨床・研究・教育に邁進して参ります。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

(形成外科診療科長 山本 匠)



NCGMで外国人医師（臨床修練医）の指導 米国ハーバード大学(BIDMC)での手術手技指導 シンガポール国立大学(NUS)での手術指導

10月18日、センター病院で災害訓練を行いました

今回の災害訓練は、勤務時間外に大規模地震（都心南部直下地震）が発生する想定で実施しました。本訓練では、災害対策本部の機能強化と現場指揮所との連携強化を目的としています。

訓練当日は、集団指導室に災害対策本部と現場指揮所を設置し、病院入口ではトリアージも実施しました。



センター病院診療科
シリーズ No.31

人間ドックセンター

わが国の人間ドックは、1954年7月12日に当センターの前身である国立東京第一病院に発足しました。その後、この日本で初めての健診システムは、人間ドックという名称で全国の病院に波及していきました。日本人間ドック・予防医療学会では7月12日を「人間ドックの日」として制定しました。



当院の人間ドックは、長年の実績と経験をもとに、高度専門・総合医療の実践を目指すナショナルセンターの人間ドックとして、より精度の高い人間ドックを目指して、2016年5月に「人間ドックセンター」として生まれ変わり、新たな一歩を踏み出しました。生活習慣病や癌などの生活に直結する疾患の早期発見や予防を積極的に進めるため、基本コースに経鼻内視鏡検査を導入、苦痛なく検査が受けられるように鎮静後のリカバリー室を新設し、同日に大腸検査も受けられるコースを開設しました。さらに臍臓・肝臓・心臓・甲状腺ドックなど臓器別コースの開設、認知機能評価を組み入れた脳ドック、感染症関連ドックや宿泊ドックなど斬新な試みを数多く取り入れています。また、当センターの人間ドックは、グローバルな視点から予防医学を推進するため、受診者は、国内に限らず、国外からも多数受け入れています。海外からの受診については、国内健診施設では圧倒的な実績を誇っており、2023年1月から今年7月までに、410名のインバウンド受診者が当施設を受診しました。

今後も受診者の需要に合わせた新規オプションの導入など行い、質の高い人間ドックを提供していきます。職員の皆様も含め、是非当院の人間ドックをご利用ください。

(人間ドックセンター長 廣井 透雄)



救命救急センター・救急科は、患者さんの生命を守る砦として、日夜総力を挙げて診療にあたっております。救急車で搬送される患者さんの初期診療を行い、状態を安定化後に適切な各診療科へ引き継ぎます。集中治療を要する重症な患者さんや外傷や中毒、環境障害といった外因性の場合は救急科にて引き続き入院治療を行っています。また、激しい外傷による整形外科手術（脊椎や骨盤）などは救急科での手術も行っております。他診療科の患者さんにおいても、状態増悪時など集中治療を要する間の入院管理も引き受けております。

当科は「軽症から重症まで、傷病の種類にかかわらず全ての救急患者に24時間対応する地域中核型総合救急医療施設ならびに災害拠点病院として、安全な高度総合医療を徹底した感染対策のもとに提供し、国の内外の規範となる」を活動理念としております。救急車の受け入れ台数は年間10,000件を越え、都内トップクラスをキープしております。当院は東京ルール指定病院として、搬送先選定に時間がかかっている患者さんの受け入れもおこなっております。

救急科は平時の救急診療のみならず、院内職員向けのICLSやBLSの開催・指導、災害訓練の実施など、危機管理の対策も担っています。また、重症症例に対応するためのトレーニングとして、大量輸血・外傷シミュレーションやECMOシミュレーションを多職種にて行っております。

今後とも地域社会のため、24時間365日精進して参ります。救命救急センター・救急科を何卒よろしくお願い致します。

(救命救急診療科長 佐々木 亮)



センター病院診療科
シリーズ No.33

臨床工学室

臨床工学室は、所属する臨床工学技士16名で、生命維持管理装置の操作及び医療機器の保守管理などの業務を行っている医療機器を専門とする部署です。

生命維持管理装置とは、人工心肺装置や補助循環装置、人工呼吸器、血液浄化装置、除細動器、閉鎖式保育器などが含まれます。

これらの生命維持管理装置の操作や点検には、より専門的な知識と技術が必要であるため、各技士が積極的に学会認定の資格や企業が主催する講習会によるライセンスを取得し、日々の業務を行っています。また、これらの医療機器を操作する医療



スタッフに対して、定期的な研修を実施しています。保守管理では、4,000台以上の医療機器をMEセンターで中央管理し、9名の委託職員と共に、安全に患者へ使用できるよう、消毒や点検・修理、必要に応じて消耗品の払い出しなどを行っています。



臨床工学技士は、ICU・手術室・血液浄化療法室・血管造影室・MEセンターに常駐し、医療機器の操作や点検など、担当する医療スタッフと連携して活動しています。また、委託職員と連携し、毎日各病棟をラウンドし、人工呼吸器などの使用中点検、心電計や除細動器の定期点検、AEDの点検と消耗品の補

充を行っています。

時間外の緊急処置や手術、医療機器の不具合などにも対応するため、当直体制で24時間365日対応しています。医療機器でお困りのことがありましたら、お気軽にご相談ください。

(臨床工学技士長 深谷 隆史)

国際診療部は、「外国籍患者と病院スタッフの橋渡し」として、言語や文化の違い、制度など複雑な内容をサポートしております。「患者がスムーズに医療が受けられるように」また「医療者がいつもと同じような質と安全性を保った医療を提供できるように」を目的に、医師、医療コーディネーター（看護師）、通訳者や事務が従事しております。

来年、2025年、国際診療部は創立10年を迎えます。この10年で新宿区の外国籍住民の人口は増加し、実に「8人に1人」が外国籍の方です。また2023年以降、旅行者などの訪日外国人は急増し、コロナ前よりも多くなっております。特に新宿・大久保は旅行者が訪れる有数のエリアで、年間1000万人が訪



医師とコーディネーター(看護師)
このほかたくさんの方の通訳、事務がいます！

れている、とも言われております。当然ながら病院を受診する方も増え、外国籍患者を受診するのが当たり前の時代になった、といえます。目まぐるしい変化の中、まだまだ力不足のところはありますが「在住者が安心して過ごせる地域」「旅行者が安心して滞在できる地域」の一端を当院が支えられるよう、引き続き地域の方々や医療機関と連携できればと考えております。

また、日本での医療を望むいわゆる医療渡航者も受け入れております。最近では、日本在住の家族を訪問される海外在住者が受診したい、というような相談も多く、当院で受け付けております。

(国際診療部長 日野原 千速)

11月5日、ボイラー安全祈願祭(ふいご祭り)を行いました

ふいご祭りは、火や金属などを扱う事業者の安全祈願の行事です。NCGM戸山地区のボイラー室では、「ふいご祭り」に由来する「ボイラー安全祈願祭」を毎年恒例の行事として行っています。各職場から代表者が参加し、厳かな雰囲気の中で、一年間の安全操業に感謝するとともに火を扱う業務などに従事する職員並びに施設の安全を祈念し、次の一年も無事故で操業ができるようにと願いを込めました。



研修医の窓

研修医主催・院内勉強会の紹介

センター病院 初期臨床研修医2年目 大島 鴻太

今年度から、研修医主体で勉強会を開催しています。せっかく同期も指導医の先生方もたくさんいるのだから、自分達が最大限成長できる勉強会をつくりたいと思い、チーフレジデントの先生方にサポートいただきながら、3種類の勉強会を運営し始めました。

1つ目は、昨年度も行われていたイブニングセミナーです。直近では、当院精神科の前田翠先生にせん妄についてご講演いただきました。今後も定期的開催予定ですので、セミナーにご協力いただける先生がいらっしゃいましたら、ご連絡いただけますと幸いです。

2つ目は、研修医主体のテーマ別勉強会です。月2回の頻度で、各回担当研修医1名が自分の興味のある分野について、レクチャーをするというものです。お互いに知識を補うことができ、また担当となる回の準備もとても勉強になります。

そして3つ目は、症例検討会です。実際に経験した症例を用いて、主訴や現病歴を提示するところから始まり、グループに分かれて鑑別疾患や必要な検査などを議論します（写真）。レジデントや総合診療科の先生方にも参加していただき、議論は毎回大変盛り上がっています。

また、勉強会資料は独自に立ち上げた研修医の共有ドライブで共有しており、未来の研修医達へ引き継がれることと思います。引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



Infomation

茅ヶ崎FMにて『Dr山田のエボラジククリニック』を放送しています

2024年8月より毎週土曜日午前11時からの生放送 **エボシC調レディオ内**にて『Dr 山田のエボラジククリニック』を放送しています（放送は隔週第2,4）。茅ヶ崎市立病院外科の山田純先生とNCGM食道胃外科の山田和彦医師がメインとなり、司会の杉山玲子さんと一緒に様々な健康に



関する疑問に答えていく番組です。地元FMですが、WEBでも視聴できます。

<https://chigasaki-fm.com/>

お時間ある時に是非ご視聴ください！

第697回日本内科学会関東地方会で奨励賞を受賞して

センター病院 初期臨床研修医1年目 青木 裕之

先日2024年7月14日に日本都市センターにて開催されました第697回日本内科学会関東地方会にて「産褥期に皮膚筋炎を発症した2例」の演題で発表する機会をいただき、光栄なことに関東地方会奨励賞を受賞いたしました。

NCGMに入職して初めてローテートする診療科が膠原病内科で、医師になったばかりの未熟な私に手厚くご指導くださった当院膠原病科の秋山優弥先生、山本有人先生、そして科長の金子礼志先生には心より感謝申し上げます。

内科学会では様々な科の先生がたが各々の科で経験された症例について発表なさっており、どれも興味深いものばかりで大変刺激的でした。今回の学会への参加と発表を通じて学んだことを今後の日々の実臨床や学会発表の機会に活かせるよう精進して参りたいと思います。



(左)山本有人先生、(右)秋山優弥先生

コース別研修の強み

センター病院 初期臨床研修医1年目 道園 菜々子

初期研修医1年目小児科コースの道園菜々子と申します。NCGMで医師としての第一歩を踏み出してから早いもので半年の月日が経ちました。不安と期待に満ち第三教育研修棟前の桜を見上げた初日の朝を、今でもはっきりと覚えています。

NCGMでは各学年33名の研修医が7つのコースに分かれ研修を行なっています。私の所属する小児科コースでは2年間の研修のうち7ヶ月が小児科研修に割り当てられています。学生時代から小児科に強い関心があった私は小児科コースの存在に強く惹かれ、NCGMの門を叩きました。最初の2ヶ月間は右も左も分からない中、小児科の先生方に一からご指導いただきました。その後は救急科や呼吸器内科など成人を主な対象とする診療科で研修を行い、全身管理や病態把握に加えて小児期の併存疾患が長期的にどのような経過を辿るのかという観点からも非常に学びの多い研修を受けています。



初期研修、そして医師としての人生はまだ始まったばかりです。医学という奥深い領域に圧倒され、時に打ちのめされそうになることもありますが一歩ずつ前に進んでまいりたいと思います。皆様今後ともご指導の程、よろしく願いいたします。



10月27日、センター病院でブラック・ジャックセミナーを開催しました

本セミナーは、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社との共催で、中学生を対象に開催しました。参加者は実際の医療機器を使用し、病院勤務の外科医の仕事を体験することができます。

当日は、多数の応募者の中から選ばれた中学生が参加しました。センター病院外科医の協力のもと、縫合や内視鏡手術体験、自動縫合器・吻合器の操作、手術室での超音波（電気メス）・ロボット体験が行われました。

セミナーの最後には、山田副院長から修了証が授与され、国土理事長の閉会挨拶で締めくくられました。

参加者からは「貴重な体験ができて楽しかった」「将来の職業選択に役立たせたい」といった感想が寄せられ、大変好評でした。



縫合体験



内視鏡手術体験



自動縫合器・吻合器体験



超音波(電気メス)体験



ロボット体験



国土理事長による閉会挨拶

夏のキャリア見学会を実施しました！(8/7,8,9,29,30)

(寄稿)看護部 副看護部長 高橋 美穂

NCGM看護部では、看護師を目指している学生を対象にキャリア見学会を実施しました。北は北海道、南は宮崎と、全国から5日間で総勢435名(対面5回:320名、オンライン3回:105名)の学生が参加してくれました。

見学会では、まず最初にNCGMの概要や特徴、看護部の役割・ミッションと教育体制などNCGMの魅力ややりがいについてお伝えしました。その後、数班に分かれて院内ツアーを行い、救命救急センター・シミュレーションセンター・特別個室病棟(16階)などを見学後、病棟で先輩看護師との座談会を開催しました。座談会は終始和やかな雰囲気、新人看護師との交流機会にもなり、学生たちからは「働くイメージを持つことができた」との声も聞かれました。座談会の後は、会議室に戻り、スペシャリストや国際協力局経験者から経験談が語られ、学生たちは興味深く耳を傾けていました。経験談の後は、興味ある部署ブースへ移動し、先輩看護師に積極的に質問したり熱心にメモをとったり、将来のキャリアへ期待を膨らませる様子をうかがうことができました。

今回の見学会では、テーブルセッティングの装飾や掲示物、動画などNCGM看護部の理念でもある“あたたかさ”が伝わることを願い、準備しました。参加者の中から未来のNCGMナースが誕生することを楽しみにしています。



“新企画”看護師体験(シャドウイング)を9月に開催しました！

9月に、看護師体験(病棟でのシャドウイング)を4回実施しました。この企画は、当院の夏のキャリア見学会に参加し、かつ当院での実習経験がない学生を対象に応募を行いました。今年から新たに開始した企画でしたが、145名もの応募がありました。その中から、4日間で計29名の学生が、病棟看護師と共に患者さんのケアを行ったり、カンファレンスに参加しました。参加者は北海道から宮崎まで全国各地にわたり、参加した学生からは「説明会で聞いたあたたかい看護を実際



に見ることができた」「採用試験を受けたい」などの感想が寄せられました。次回は2月に、受け入れ人数を増やして開催する予定です。

米国ネブラスカ州Biocontainment Team使節団が NCGMを訪問しました

(寄稿)国際感染症センター(DCC)国際感染症危機管理対応推進センター(GIC)運営室長/医師 松澤 幸正

2024年7月31日(水)、8月1日(木)、米国ネブラスカ州Biocontainment Team(ネブラスカ大学医療センター〔UNMC; University of Nebraska Medical Center〕、ネブラスカ医療センターの専門家で構成)の使節団5名が、国立国際医療研究センターを来訪し、日本の新興・再興感染症対策に関する診断検査、施設要件・設備、患者搬送・診療におけるベストプラクティスについて議論を行うとともに、新感染症病棟の視察を行いました。

大曲貴夫国際感染症センター長、松澤幸正国際感染症危機管理対応推進センター運営室長から「UNMCとのこれまでの連携実績及びこれからの展望」、秋山裕太郎医師から「新興・再興感染症患者の搬送」、山元佳医師から「感染症診療における病原体検査」、森岡慎一郎医師から「高度隔離病棟の設備」、守山祐樹医師から「感染症指定医療機関としての施設要件」についてプレゼンが行われ、ネブラスカ州Biocontainment Teamからは「高度隔離病棟における感染予防管理及びベストプラクティス」の共有が行われました。

本訪問は、友好的な雰囲気の中で行われ、本プログラムによりUNMC(※)やネブラスカ州関連機関との更なる連携強化の必要性が再確認されました。

※UNMCとNCGMは協力覚書(Memorandum of Understanding)を2023年2月に締結し、新興・再興感染症対策に係る連携を行っております。



中日友好病院使節団がNCGMを訪問されました

(寄稿)国際感染症センター国際感染症危機管理対応推進センター(GIC) 特任研究員 井口 麻里

2024年9月11日(水)に中国北京市の中日友好病院使節団6名がNCGMを訪問されました。

NCGMでは、中日友好病院からの研修医や看護師の研修の受け入れを行っており、今までも多くの交流を行ってきました。今回は、國土理事長への表敬訪問を行い、その後、「微生物学検査室」、「ICU/HCU」、「新感染症病棟」を見学されました。微生物学検査室では、黒川正美主任、山元佳医師より感染症の迅速診断システム等の紹介を行い、ICU/HCUでは岡本竜哉医師、片桐大輔医師より感染症診療における集学的治療の紹介を行いました。



また、新感染症病棟では、森岡慎一郎医師より、高度隔離病床内の設備や管理について紹介し、その後、岩元典子医師より新興呼吸器感染症に関する研究(「COVID-19での経験と次のpandemicに備えて」、「REBIND事業」)についてプレゼンテーションを行いました。また、ディスカッションのセッションにおいて、急性感染症患者における長期的な影響や集学的治療を含め、限られた時間の中でしたが様々な議論を行うことができ、大変有意義な時間となりました。

引き続き、他国の感染症関連機関からの視察受け入れ等を積極的に行い、新興・再興感染症対策における国際連携強化に努めてまいります。



8月29日、International Symposium for Asia Regulatory Coordinationが開催されました

(寄稿)国際ナショナルトリアル部 エグゼクティブマネジメント室長 友次 直輝

医薬品医療機器総合機構 (PMDA)は、2024年7月1日にPMDAで初の海外事務所としてアジア事務所をバンコクに設立しました。その開設を記念したシンポジウム、International Symposium for Asia Regulatory Coordinationが8月29日にタイ王国のバンコクで開催されました。

本シンポジウムでは、アジア地域の医薬品規制の連携強化に焦点が当てられました。はじめに、武見敬三前厚生労働大臣が挨拶に立ち、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジに対する日本の取り組みや、アジア各国の高齢化、今後のパンデミック、規制の調和に対応するための地域連携の必要性を述べました。

NCGMからは宮崎英世病院長 (センター病院)、時田大輔部長 (臨床研究センター 臨床研究推進部)、友次直輝室長 (臨床研究センター国際ナショナルトリアル部エグゼクティブマネジメント室) が招待され参加しました。

宮崎病院長は、「Collaboration with PMDA Asia Office - from the infectious disease clinical trial - (PMDAアジア事務所との連携 -感染症領域における国際臨床試験-) 」と題し、NCGMのバイオバンキングとゲノム医療のための「3Gイニシアチブ」、2021年に発足したARO Alliance for Southeast & East Asia (ARISE) を紹介しました。加えて、国立健康危機管理研究機構 (JIHS) の紹介や、PMDAと連携した薬品開発等のアジアにおける研究発展について挨拶のスピーチを行いました。

パネルディスカッション Asia Clinical Trials and Collaboration with Asian Regulatory Authorities - Collaboration to Improve Clinical Trial Capacity in Asia -

(アジアの臨床試験とアジア規制当局との協力 -アジアにおける臨床試験能力向上への協力) では、時田部長が今後起こりうるパンデミックの対策として、JIHSやARISEを通じたアジアの臨床試験能力の強化の必要性について発表を行いました。友次室長はパネリストとして登壇し、アジアに焦点を当てた臨床試験の重要性、遺伝的配慮、迅速な試験開始、国際的な承認に向けた質の高いデータの担保を確保するため、国際臨床試験プラットフォームであるARISEの重要性を強調しました。

本シンポジウムは、PMDAアジア事務所がアジア全域における医薬品規制と医療安全保障の推進において極めて重要な役割を担うことを改めて示しました。



国際医療協力局グローバルヘルスレポート 在外職員奮闘記！！カンボジア王国 Vol.21

国際協力機構(JICA)カンボジア王国 非感染性疾患対策プロジェクト

チーフアドバイザー 春山 怜(医師)

昨今、開発途上国と呼ばれてきた国々においても、経済成長に伴う人口構造や疾病構造の変化により、心血管疾患、糖尿病、がんをはじめとする非感染性疾患（NCD）が増えつつあり、その対策強化が急務となっています。カンボジアも例外ではありません。

2024年2月からはじまったJICAカンボジアNCD対策プロジェクトでは、①保健省における国家NCD戦略計画の実施の適正化、②対象州（コンポンチャム州）保健局におけるNCD対策管理・運営体制の

強化、③州病院・郡病院における糖尿病、高血圧、子宮頸がんサービズ提供の改善により、NCD対策能力の強化を図ることを目的としています。

カウンターパートの期待が大きく、やりがいを感じる面白いプロジェクトです。



国家NCD対策計画 2022-2030 レビュー会議
春山医師：写真中央

在外職員奮闘記！！ラオス人民共和国 Vol.22

国際協力機構(JICA)ラオス人民衆共和国 看護師・助産師继续教育制度

チーフアドバイザー 永井 真理(医師)

日本の医療専門職の免許は一生有効ですが、世界的には有効期限がある国が多く、ラオスは5年間です。

数年前から医療専門職への免許発行を始めたラオスでは、もうすぐ最初の免許更新の時期がやってきます。ラオス保健省は、日々進歩する医療に合わせ、5年かけて各医療専門職が知識や技術を向上させたうえで免許を更新する、という仕組みを作ろうとしています。私は看護師・助産師での仕組みづくりを手伝っており、医師・歯科医師・薬剤師などがそれに続いています。

ラオスで私の海外生活は8か国

目になります。治安よし、気候よし、食べ物よしの上、お年寄りを大切にしてお国柄で、先日卒寿を迎えた父とともに、ラオス生活を楽しんでいます。



※写真：ラオスでの一コマ 日本に留学する政府関係者の壮行会@日本大使公邸にて
永井医師を挟んで向かって右側：保健大臣
左側：保健省食品医薬品局長、
いずれも日本留学経験者

国際医療協力局グローバルヘルスレポート 在外職員奮闘記！！セネガル共和国 Vol.23

-患者さんが「質のよい医療サービスを受けることができた」と思える病院を目指して-
国際協力機構(JICA) セネガル共和国保健社会活動省保健行政アドバイザー

及川 みゆき(保健師)

私は、2024年5月、セネガルに赴任しました。

9月は病院の医療サービスの質の改善に取り組むプロジェクトの計画策定に関わり、中央、地方の保健行政や病院関係者から集中的にお話を伺う機会となりました。

ある州保健局長は「日本の医療従事者は誰が見ていなくてもすべきサービスを患者に提供するでしょう。セネガルでは誰も見ていない場合そうしない医療従事者もいます」と。また病院協会会長は「質文化が育っていない」と。

セネガルでは近年痛ましい医療事故もあり、医療サービスの

【質】へのニーズが高まっています。

新プロジェクトでは「カイゼン」マインドを共有し、限られた資源環境下での質文化の形成を目指します。NCGMの病院管理が大いに参考になりそうです！



※関係者とのプロジェクト計画書検討会議
この日の会議は10時間にも及びました。
(著者 左側下から3番目)

国際庭園の様子

ボランティアの皆さんが集まり、季節ごとの草花の手入れをしてくださっています。国際庭園は、皆さんの手で美しく保たれ、訪れる方々に癒しのひとときを提供しています。



シユウメイギク

科目：キンポウゲ科
英名：Japanese anemone
花言葉：「淡い思い」「忍耐」など



本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。



企画・発行：
NCGM 広報企画室



https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。